

第2章 史跡船来山古墳群をとりまく環境

第1節 歴史的環境

(1) 弥生時代以前の本巢郡

船来山をとりまく周辺の弥生時代以前の遺跡としては、船来山南麓の「弥勒寺遺跡」や「席田郡府遺跡」などから、旧石器時代末期から縄文時代早期の石器が出土している。また、本史跡の表土から縄文時代早期から後期までの縄文土器片や石器が出土している。石器は縄文早期・前期のものが多いが、縄文土器片はほぼ縄文時代全期を通じて出土しており、注目される。

船来山以外の遺跡では、船来山南西の「法暎寺遺跡」で磨製石器片が出土している。船来山以南では、現在のところ縄文時代の遺跡は希薄である。船来山以北の根尾地域では、根尾大井の「八谷遺跡」などで磨製石斧が出土しており、縄文時代の遺跡が多く見られる。

(2) 弥生時代・古墳時代の本巢郡

弥生時代終末期になると遺跡数は増加し始める。弥生・古墳時代の遺跡としては、東海環状自動車道建設に伴う岐阜県文化財保護センターの「上保本郷遺跡」での本発掘調査成果がある。船来山南麓から糸貫 IC 予定地までの約 1 km にもおよぶ広大な調査であり、総計 7,901 基の遺構が確認された。山麓の平地より、7 世紀代の古墳「上保岩坪 1 号墳」、「上保岩坪 2 号墳」が出土し、船来山以外の地より発見されたことで大きな成果となった。被葬者が丘陵上の船来山古墳群とどのような関係なのか解明が待たれる。船来山古墳群東南の「元正寺遺跡」では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴住居跡 1 軒、船来山古墳群以南の「仏生寺上光寺遺跡」では、わずか 144 m² の調査区より弥生時代後期初頭から古墳時代初頭の竪穴住居跡 10 軒が出土している。

船来山南西には、県史跡「宗慶大塚古墳」がある。昭和 63 (1988) 年の真正町教育委員会による範囲確認調査では、全長約 63m の前方後円墳であることが判明し、前方部は撥型である可能性が指摘された。周溝底からは 3 世紀後半の土器（廻間Ⅱ式後半からⅢ式併行期）が出土した。扇状地から沖積低地へ移り変わる地形に立地しており、弥生時代から始まったと考えられる稲作農耕の影響も考えられる。宗慶大塚古墳周辺では、「番場遺跡」で岐阜県文化財保護センターによる本発掘調査が行われており、弥生時代終末期の方形周溝墓、古墳時代初頭の大型の溝状遺構、竪穴住居跡、掘立柱建物跡が出土した。このほか、宗慶大塚古墳以北の同「番場遺跡」内では、弥生時代終末期から古墳時代初めの竪穴住居跡が計 12 軒出土するなど、宗慶大塚古墳周辺には集落跡が広がっていたことが徐々に分かり始めている。さらに、宗慶大塚古墳以北、船来山古墳群南西には「教念寺遺跡」があり、弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴住居跡が 2 軒出土した。このように船来山以南では、まだ発掘調査事例は少ないものの、徐々に船来山古墳群の始まりの時代の様相が分かり始めている。

船来山以北の権現山には、古墳時代後期の群集墳「法林寺此奥古墳群」がある。現在のところ、権現山の南麓に約 25 基が確認され、そのうち 4 基（1、3、4、6 号墳）は、本市の史跡に指定



宗慶大塚古墳



法林寺此奥 6 号墳と五輪塔

されている。船来山以北の大平山には、前方後方墳の可能性のある全長約 60m の「西峯前方円（後）方墳」が確認されている。大平山南麓の文殊古墳では、詳細遺跡分布調査の測量中に 5 世紀後半の円筒埴輪片が表採された。このほか大平山中腹には「西ノ門古墳群」、権現山西麓には「スボミ丸山古墳群」、「スボミ東古墳群」、「スボミ西古墳群」が分布している。これらの古墳群は 4 基から 5 基で形成され、船来山古墳群の分布状況とは異なる様相である。

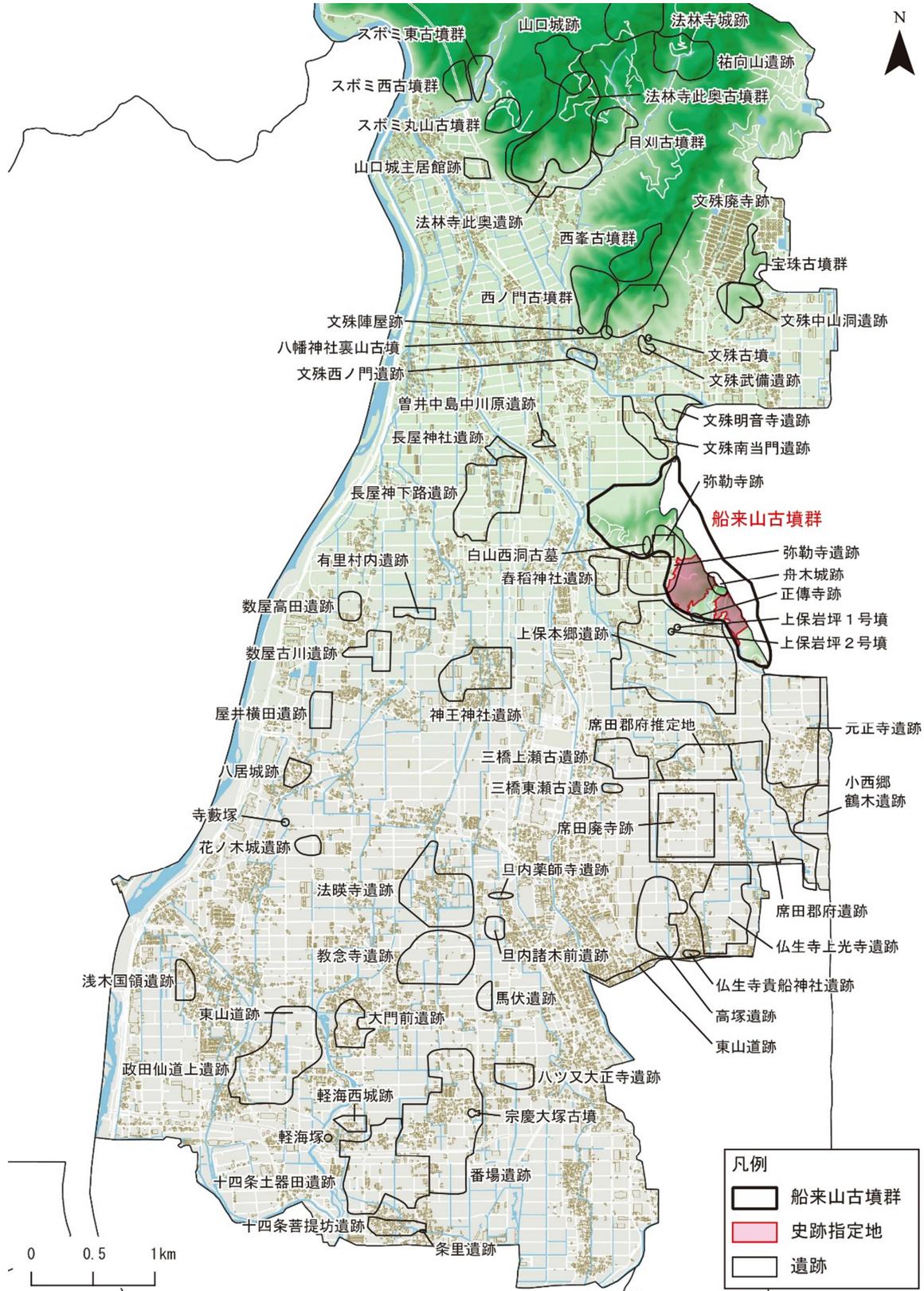


図 7：史跡船来山古墳群周辺の遺跡分布図

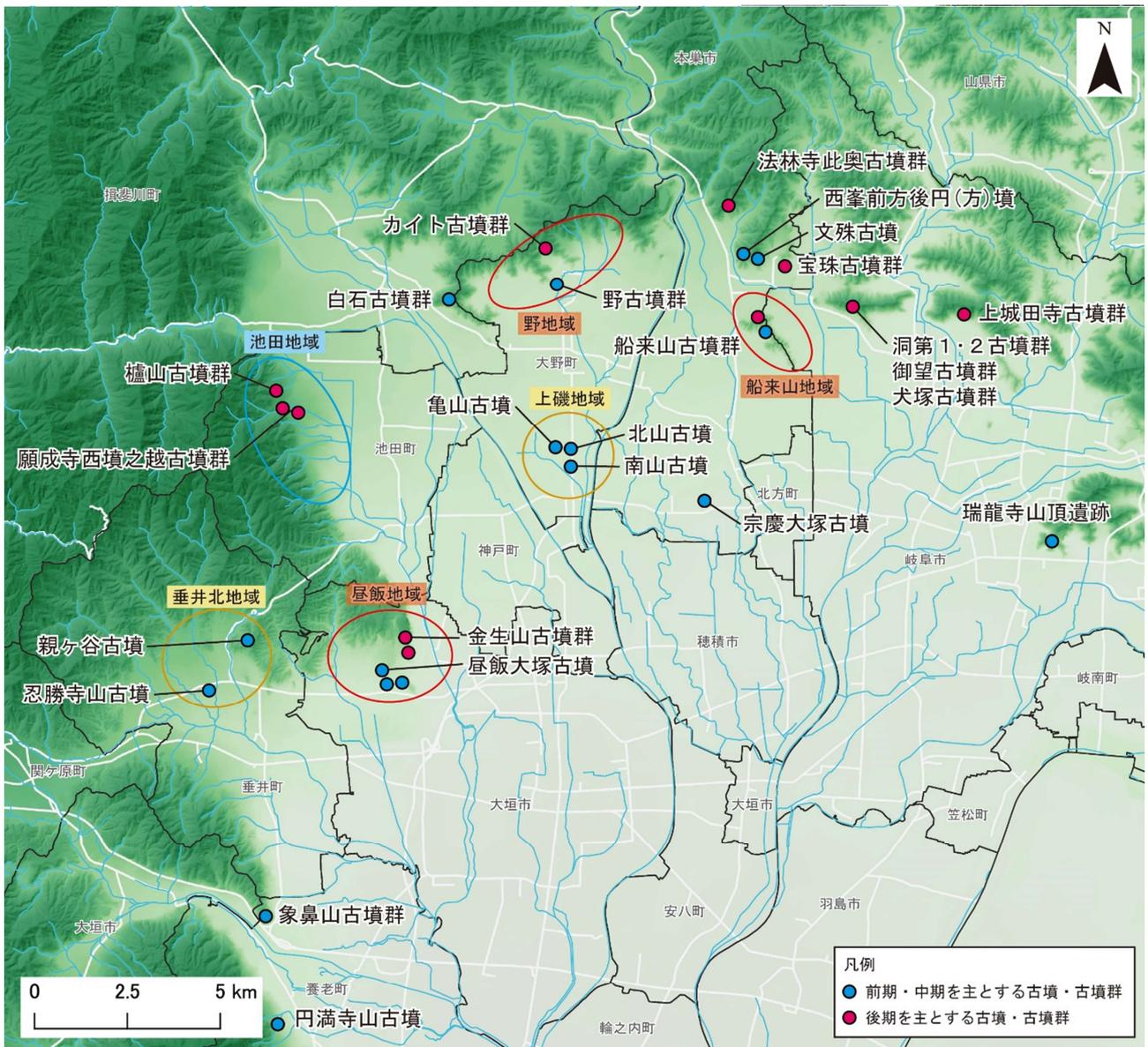


図8：史跡船来山古墳群周辺の遺跡

船来山山頂からは、揖斐郡大野町の国史跡「野古墳群」や「カイト古墳群」、「北部山麓古墳群」、揖斐郡揖斐川町の「白石古墳群」、揖斐郡池田町の池田山に築造された県史跡「願成寺西墳之越古墳群」や「檀山古墳群」などを見渡すことができる。またこれらの古墳群をはじめとして、大垣市の国史跡「昼飯大塚古墳」、「東町田古墳群」、金生山の「花岡山古墳群」、「金生山古墳群」、養老山脈の養老町史跡「象鼻山古墳群」や「円満寺山古墳」、金華山南方の岐阜市史跡「瑞龍寺山頂遺跡」などが分布し、澄んだ晴れた日には船来山古墳群から上記の古墳群や伊勢湾方面、名古屋方面を見渡すことができる。

(3) 古代の本巢郡・席田郡

古墳時代の後、「本巢」という名が初めて文献に登場するのは『古事記』、『日本書紀』における本巢国造に関する記述である。6、7世紀代には、「本巢国造（美濃国造）」が西濃地域の統治者として存在し、「本巢郡」がその中心地であったと思われる。古墳群造営ののち、白鳳期（7世紀後半）には、山麓に古代寺院「弥勒寺」が、弥勒寺より南へ約2kmの場所には古代寺院「席田廃寺」が創建された。

大宝2（702）年の「大宝戸籍」には、「本巢郡栗栖太里」戸籍が残されている。推定地は、本市南端

の宗慶から軽海周辺が比定され、先述の県史跡「宗慶大塚古墳」がある。「番場遺跡」本発掘調査では、8世紀（奈良時代）から10世紀代（平安時代）の竪穴住居跡計106軒が出土した。本巢郡の中心地的な遺跡であった可能性も考えられる。近隣の「教念寺遺跡」の本発掘調査では、同時代の竪穴住居跡を12軒検出している。

『続日本紀』には、この後、和銅8（715）年7月に、船来山山麓周辺に尾張国からの新羅人74家を入植させて、本巢郡から船来山山麓部分を分けて席田郡が建郡されたことが記載されている。『日本三代実録』には、仁和3（887）年、美濃国分寺が焼失した際に、席田郡の定額尼寺（席田廃寺）を一時の国分寺としたという内容が記載されており、古墳時代以降も大変栄えた土地であったことがうかがわれる。建郡当時の美濃国司は「笠麻呂」であり、席田郡の建郡も彼の存在を抜きにして考えることはできない。笠麻呂は古代木曾路の開削者として有名だが、慶雲3（706）年に美濃守に任ぜられると和銅3（710）年の再任を経て養老4（720）年まで14年間も美濃守を務めている。席田郡内においては、「席田郡家推定地」の本発掘調査で古墳時代後期から奈良時代、平安時代にかけての竪穴住居跡や大型の土手状遺構と未成品の鉄製品を伴う住居跡等（鍛冶遺構の可能性）が出土している。また「元正寺遺跡」では、28軒の竪穴住居跡と2棟の総柱建物、鉄製品（未製品か）が出土している。先述の「上保本郷遺跡」本発掘調査では、10世紀から11世紀後葉の時期（平安時代）に、複数の鍛冶炉（3基）と鍛冶炉の上屋建物の可能性がある柱穴群（24基）、床面に2基の炉跡を伴い、周囲から金床石が出土した竪穴住居跡等が出土し、鍛冶工房があったことが確認されている。鍛冶関連遺構・遺物はこの後の13世紀末まで多く出土しており、先の席田郡家推定地から船来山古墳群南麓までのエリアが、席田郡、本巢郡の鉄鍛冶などの生産域の中心地であった可能性も考えられる。席田郡は南北約4km、東西約2kmの比較的狭隘な地であったが、古代中世を通じて大変栄えた土地であったと考えられる。

本巢郡北部では、先の大平山南麓の文殊古墳周辺に「文殊廃寺」が創建された。現在でも「西ノ門」、「南当門」等の寺院関連地名が残り、「大亀寺」、「善永寺」等の寺院もある。昭和51（1976）年の集中豪雨の際、大亀寺北東の谷が決壊し土砂崩れが起こった際に古代瓦（ほぼ完形、軒丸瓦）が出土した。弥勒寺跡、席田廃寺跡出土瓦が川原寺式なのに比べ、文殊廃寺跡出土瓦は単弁八弁蓮華文軒丸瓦であり、様相が異なる。また「神王神社遺跡」周辺では、現在も「見延（ミノベ）」という地名を伝えており、『和名類聚抄』にある本巢郡美濃郷や、美濃部郷推定地の可能性が指摘されている。



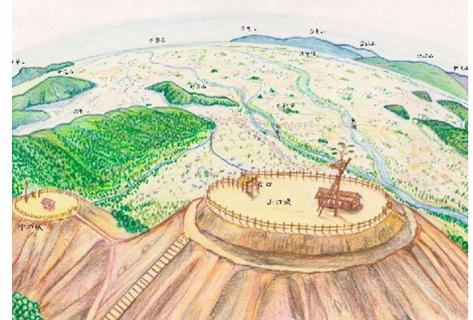
文殊廃寺跡出土瓦

（4）中世・戦国時代の本巢郡・席田郡

本市の西端では、北部の山岳地帯からの大小河川のほとんどを合流する根尾川が南へ貫流しているが、享禄3（1530）年の大洪水が起こる前は、本流は市の中心部を流れる糸貫川であり、船来山の西端を流れ、現在の国道157号に沿うような形で市内を南北に貫流していたと考えられる。根尾川は享禄3（1530）年の大洪水により、山口村より西南の村々を流して新しい流れを造った。そのため、農業用水が不足となり、船来山南麓の席田井組により根尾川を山口で堰き止め「一井大堰」を作り、農業用水の取入れを始めた。その結果、農業用水をとれなかった真桑井組は水論を起し、船来山南麓の席田井組と対立してきた。結局結論が出ず、寛永18（1641）年に6対4の割合で水を入れることを幕府が決定した。その後も運営その他で争いが起きたが、昭和19（1944）年の根尾川改修で糸貫川を完全に締め切り、「水

門」を設けて席田用水として利用されるようになり、水論は決着した。このように船来山をとりまく水系は、中世から大きく変遷しており、その変遷による影響は、近代、現代にいたるまで残されている。市内の南端にあたる北方町境、またその西への延長上の旧真正町内には、東山道関連地名（センドウ地名）が残る。この関連地名は現在の根尾川を越え大野町側へ分布しており、古代から河川交通のほか、陸路の交通網が市内の東西に横断する地勢であったことが推測される。

中世・戦国時代には、本市内は荘園、国衙領となった。船来山山頂には、美濃国守護土岐氏の拠点となった山城船木城跡（葎田の砦）が築かれた。ゴルフ場開発に伴う本調査の際に尾根上で検出された溝状遺構（SD1、SD2）が堀切遺構ではないかと考えられる。船来山以北の権現山、祐向山の山頂には、「山口城跡」、「法林寺城跡」、「祐向山城跡」、「掛洞城跡」が築かれ、船来山の山城は、これらの根城に対して前線基地のような機能を果たしていたと考えられている。権現山山麓から享禄の大洪水による用水取入口周辺には、「山口城主居館跡」が形成され、重要な拠点であったことを今に伝えている。船来山南麓では、先の「上保本郷遺跡」内で鍛冶工房が出土したほか、権衝といった計量器も出土している。特に15世紀代の遺構は、席田用水付近の南西部で多く確認されており、大溝で囲われた建物が確認されている。



山口城跡鳥瞰図（イメージ）

宗慶大塚古墳西の犀川左岸には、市指定史跡「軽海西城跡」が築かれ、斎藤道三（当時は西村勘九郎）の伝承が残る。天正17（1589）年に一柳直末が入城するものの、翌年には駿河山中城で討ち死にし、その後廃城になったとされている。「政田仙道上遺跡」では、東海環状自動車道建設に伴う本発掘調査で、幅2mを超える区画溝で囲われた建物や大量の中世銭を伴う土坑等が確認された。しかし、「上保本郷遺跡」、「政田仙道上遺跡」ともその後は継続せず、17世紀代には廃絶したようである。



軽海西城跡のある円長寺全景

（5）近世、近代の本巢郡・席田郡

近世には本市の大半が大垣藩領となったが、船来山南麓の「上保」は旗本大嶋家の領地となった。江戸時代には、船来山は名古屋城築造に伴う石垣普請の石切場となった。船来山には現在も石丁場の痕跡が残され、登り口入り口にある八幡神社・北野神社では、本殿裏に刻印が刻まれた大岩があるほか、「享禄十九年」

（1734）の紀年名が刻まれた母岩、狛犬などが残されている。名古屋城築造時だけでなく、その後の修理の際にも切り出されたようである。船来山古墳群の横穴式石室については、この時に石室の石が抜き取られて運ばれたものが多いようであり、発掘調査の際に天井石が残されていた古墳はほとんど無かった。切り出された石材は、席田用水沿いの川湊を経て



刻印のある大岩

岐阜市尻毛へ運ばれ、長良川から太平洋へ出て名古屋城へ運ばれたと考えられる。その直後の安永年間（18世紀後半）にはO支群・M支群山麓に正傳寺が築かれ、叢虫山人作『妙法山正傳寺境内糸貫川眺望之図』には、正傳寺と席田用水に帆掛け船が運行している様子が描かれている。

明治時代に入ると、船来山は富有柿の一大産地となった。尾根から山麓に至るまで開墾され、山全体が富有柿畑となった。山中にはモノレールが敷かれ、段々畑造成のために船来山古墳群の石材が抜き取られ、畑の石垣となった。明治 21 (1888) 年には、明治政府により「市制・町村制」が公布され、船来山周辺は席田村となった。「席田村役場」は、「席田郡家推定地」近隣地の「席田小学校」隣地に置かれた。船来山周辺は、近代・現代になっても、昭和 31 (1956) 年に合併して「糸貫村」となるまで、行政の中心であり続けた。太平洋戦争時には、船来山山麓に旧日本軍の滑走路が建設され、戦後直後に撮影された航空写真にも滑走路の痕跡が確認されている。戦時中や戦後直後は、食糧難のため副葬品を狙った乱掘も行われた。富有柿は戦後の大きな収入源となり、現在も市を代表する特産品であるが、昭和 50 年代から後継者不足のため山中の柿畑は放棄されるようになり、現在でも営農を続けているのは数軒となっている。

第 2 節 自然的環境

(1) 立地

船来山は、北方に連なる美濃山地の南端から独立する標高約 116.5m の小丘陵であり、濃尾平野の北端部、根尾川左岸東方に位置する。根尾川が山地から平野部に移る山口付近を扇頂として形成された根尾川扇状地であり、船来山周辺の平野部では古くから水田や果樹園などの耕作地が広がっている。

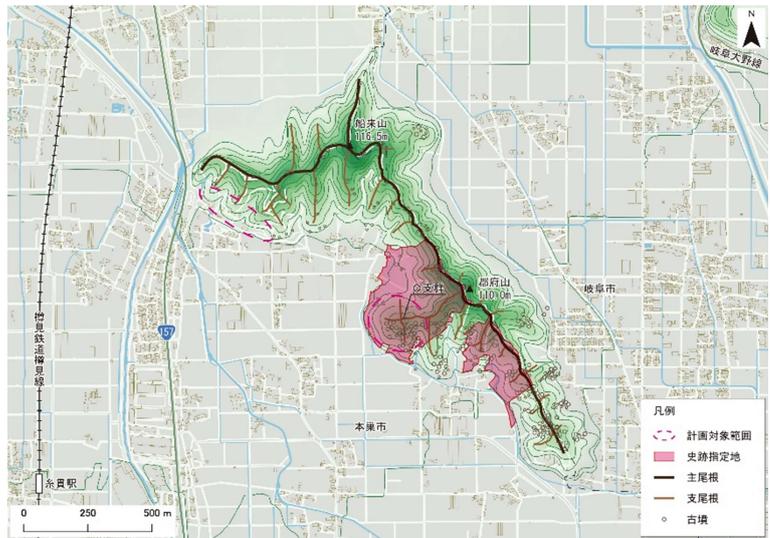


図 9：尾根の構成

(2) 地形・地質

船来山は南東から北西、北西端で北と西方向にのびる主尾根からなり、主尾根から直交して支尾根が細かく舌状に伸びる。標高 116.5m が最高（船来山山頂）で、南東に伸びる主尾根中央部に郡府山と呼ばれる標高 110.0m の小ピークがある。このほか、八幡山、桑山といわれる小山の連なる丘陵となっている。船来山は、古生代地層の硬砂岩が主体を占め、一部に軟砂岩、粘質系岩が分布している。八幡山以南は、青色硬砂岩が多く、前項で述べたように各所で採石の跡が確認されている。表層地質は、北部の船来

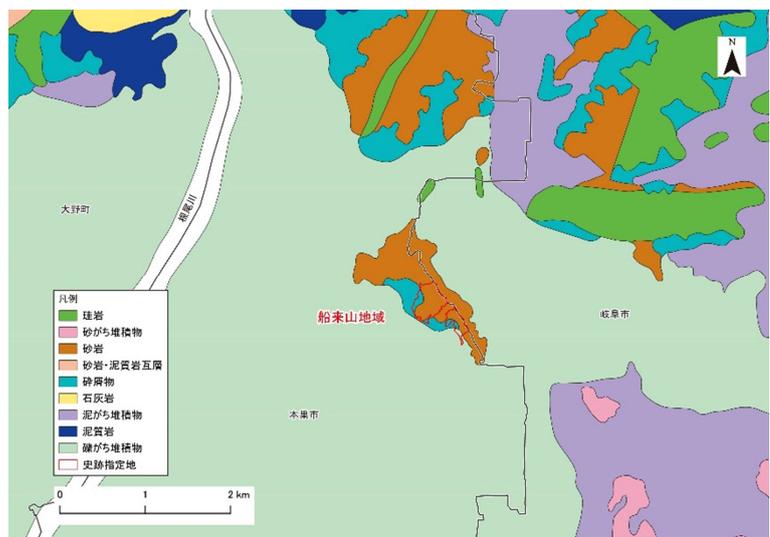


図 10：船来山周辺地質図

山と中央部の八幡山以南に二分し、それぞれ根尾統、外山統としている。その土壌断面を比較すると、角礫の混ざり方が多少異なる。根尾統には角礫が極めて少なく、外山統には多い。

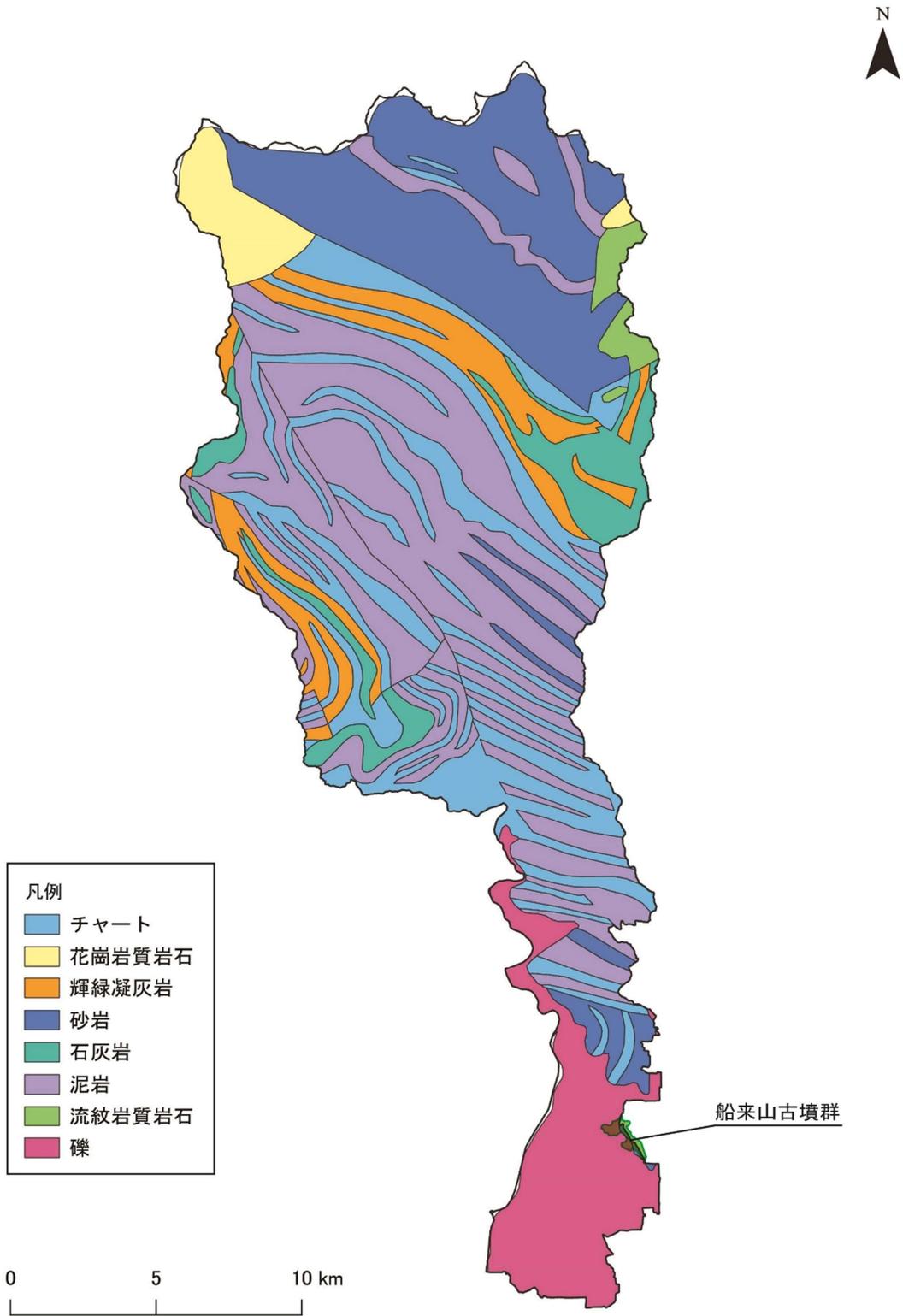


図 11 : 本巣市地質図

(3) 気候

船来山周辺の気候は、太平洋岸式気候に属し、岐阜県内においても比較的温暖である。梅雨から夏にかけては、南東の季節風の影響を受け、高温多湿で降雨量も多い。冬は北西の季節風の影響を受け、低温で降雨量も少ないが、「伊吹おろし」と呼ばれる北西の冷たい季節風が吹く。さらに、船来山は濃尾平野の北端であるという立地から、こうした季節風の影響を大きく受けており、12月から2月は氷点下まで気温が下がる時期があり降雪がある。船来山以北の丘陵地帯は、北半の根尾地域にかけて、徐々に積雪量が多くなっていくという傾向がある。

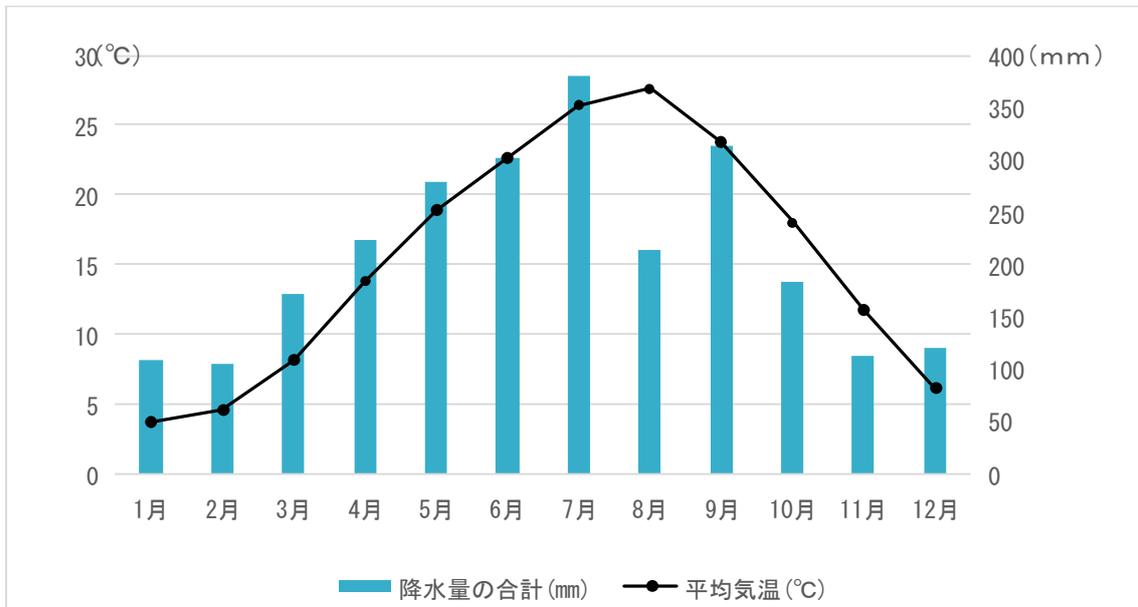


図 12：本巣市の年間平均気温・降水量（気象庁 HP をもとに作成）
統計地点は揖斐川を準用

(4) 水系

揖斐川水系根尾川が市西端を流れている。根尾川と船来山の間には支流の糸貫川が流れていたが、享禄3（1530）年の大洪水までは、船来山西麓を流れる糸貫川が本流であった。このため、船来山南部の扇状地には多くの旧河道や後背湿地、自然堤防が残されている。このような扇状地という自然条件は、平地に古墳を造らせなかった要因の一つである。

船来山は小ピークが連なる丘陵地系をなしており、その間に谷が細かく入り込んでいる。南麓の標高 30m 付近には、山の伏流水（地下水）が湧出する崖錐泉が見られ、共同井戸として生活に利用されていた。現在も山谷と弥勒寺谷には湧水地があり、弥勒寺谷には共同井戸が残っている。



図 13：船来山周辺水系図

(5) 揖斐川水系根尾川（旧藪川）と糸貫川（席田用水）の変遷

根尾川は享禄3（1530）年の大洪水により、山口村より西南の村々を流して新しい流れを造った。このように船来山をとりまく水系は、中世から大きく変遷しており、その変遷による影響は、近代、現代にいたるまで残されている。現在席田用水は、「岐阜県の名水50選」、農林水産省「疎水百選」に選定されており、後述するゲンジボタルの生息地としても有名である。



ゲンジボタル

(6) 災害

船来山は、明治時代から富有柿畑の開墾が始まり、大正、昭和、戦後も続いたため、雨による表土の流失が激しく、山崩れなどの災害が起こっている。昭和50年代から、徐々に富有柿畑が放棄されるようになり、さらに荒廃が進んだ。船来山のうち山谷地区北洞では、昭和51（1976）年9月11日に大規模な土砂災害が起きた。大型台風によって数日にわたり降り続いた雨が直接の原因であったが、山谷地区北洞は表層地質が外山統で礫層が多く、地下50cm以下に角礫が20%以上混じった地層であった。降り続いた雨水が地下水となって礫層中に溜まったことで、山崩れを起こし土石流となり、山麓の家屋などを約50m押し流した。また、崩落箇所の上では放棄された柿畑跡があり、雑木の茂みになっていた。この区域の林相は柿4割、雑木6割で、崩落が起きた両側の丘陵は比較的耕作中の畑も多かったが、柿畑の荒廃等で保水限界を超えた土壤が一気に崩壊したものと考えられている。災害後には砂防堰堤が築かれ、被害家屋は50m南に移転したが、現在も船来山の一部の区域は、土砂災害防止法に基づく「土砂災害特別警戒区域」、「土砂災害警戒区域」に指定されている。また、この山谷地区北洞周辺と船来山O支群東麓周辺は砂防指定地にも指定されている。

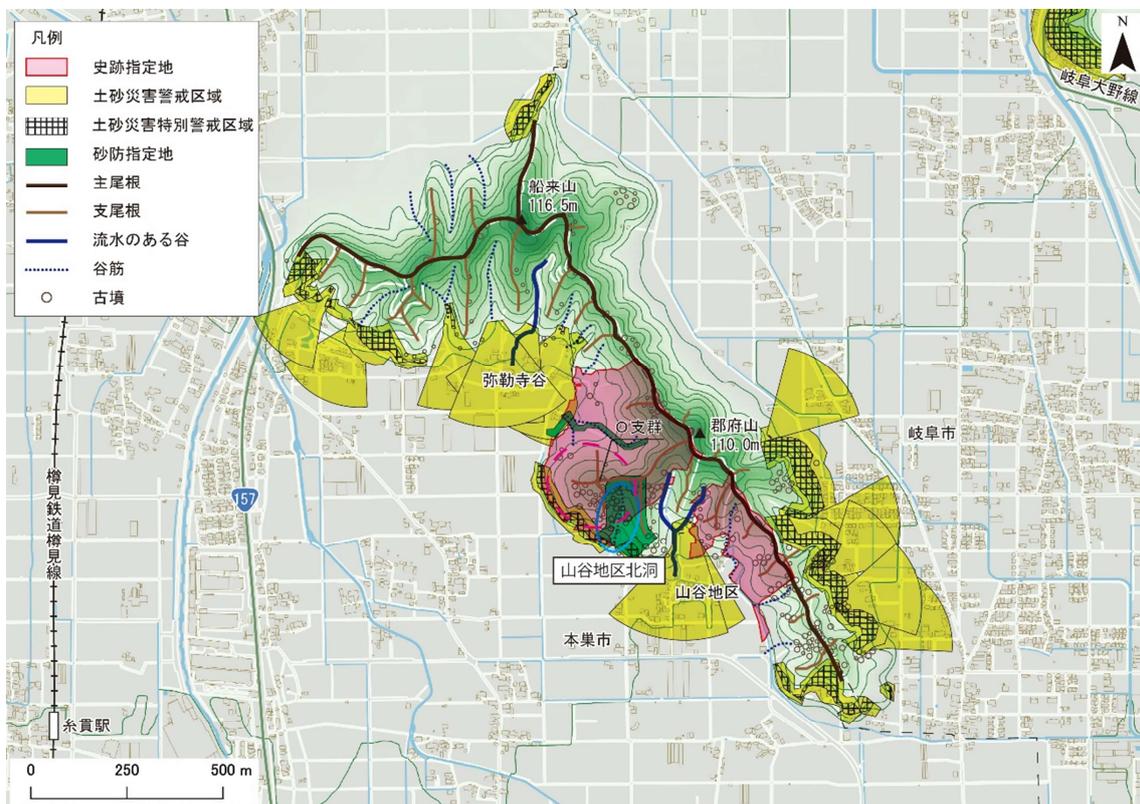
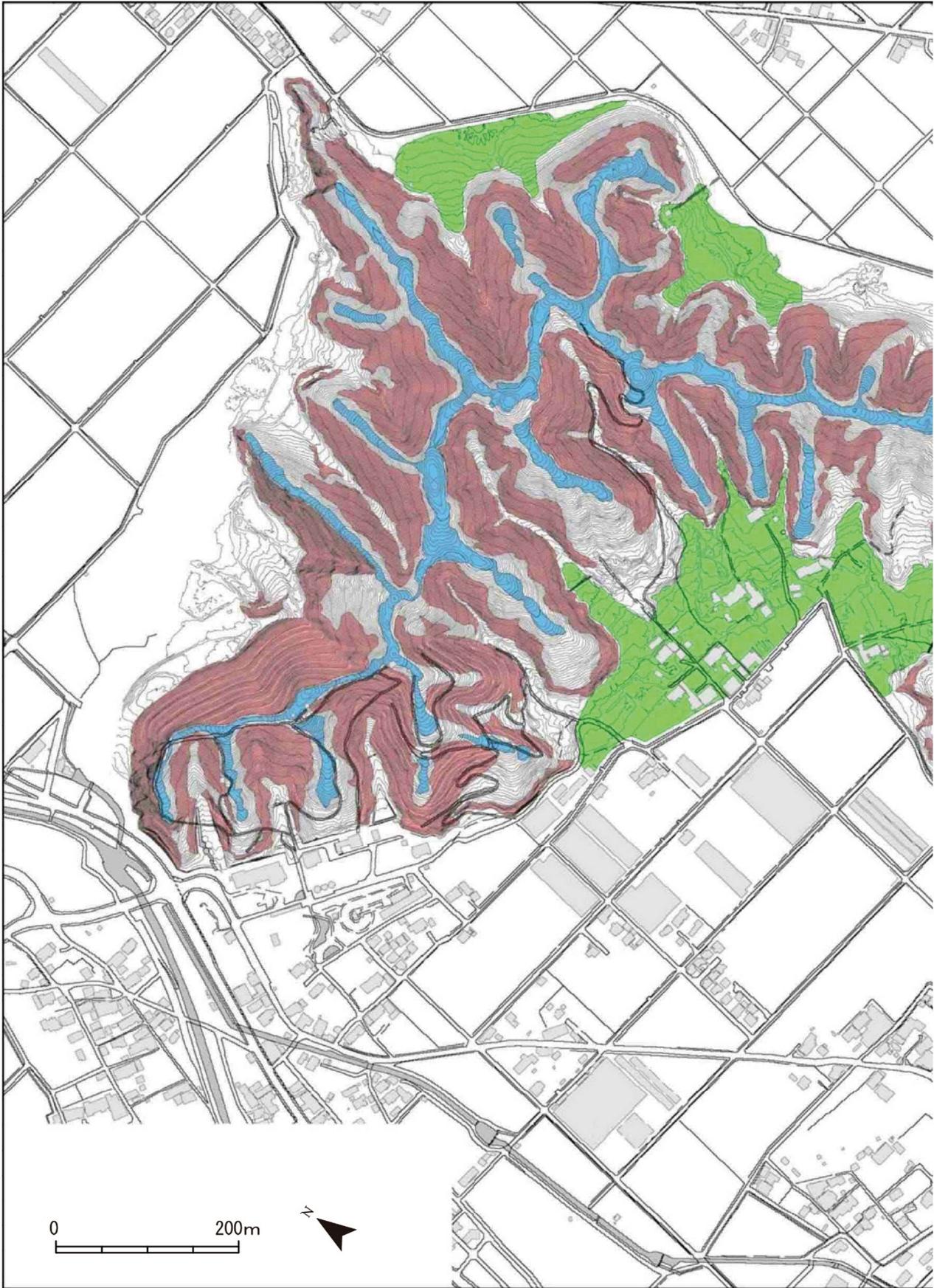


図14：船来山の水系と災害発生箇所図



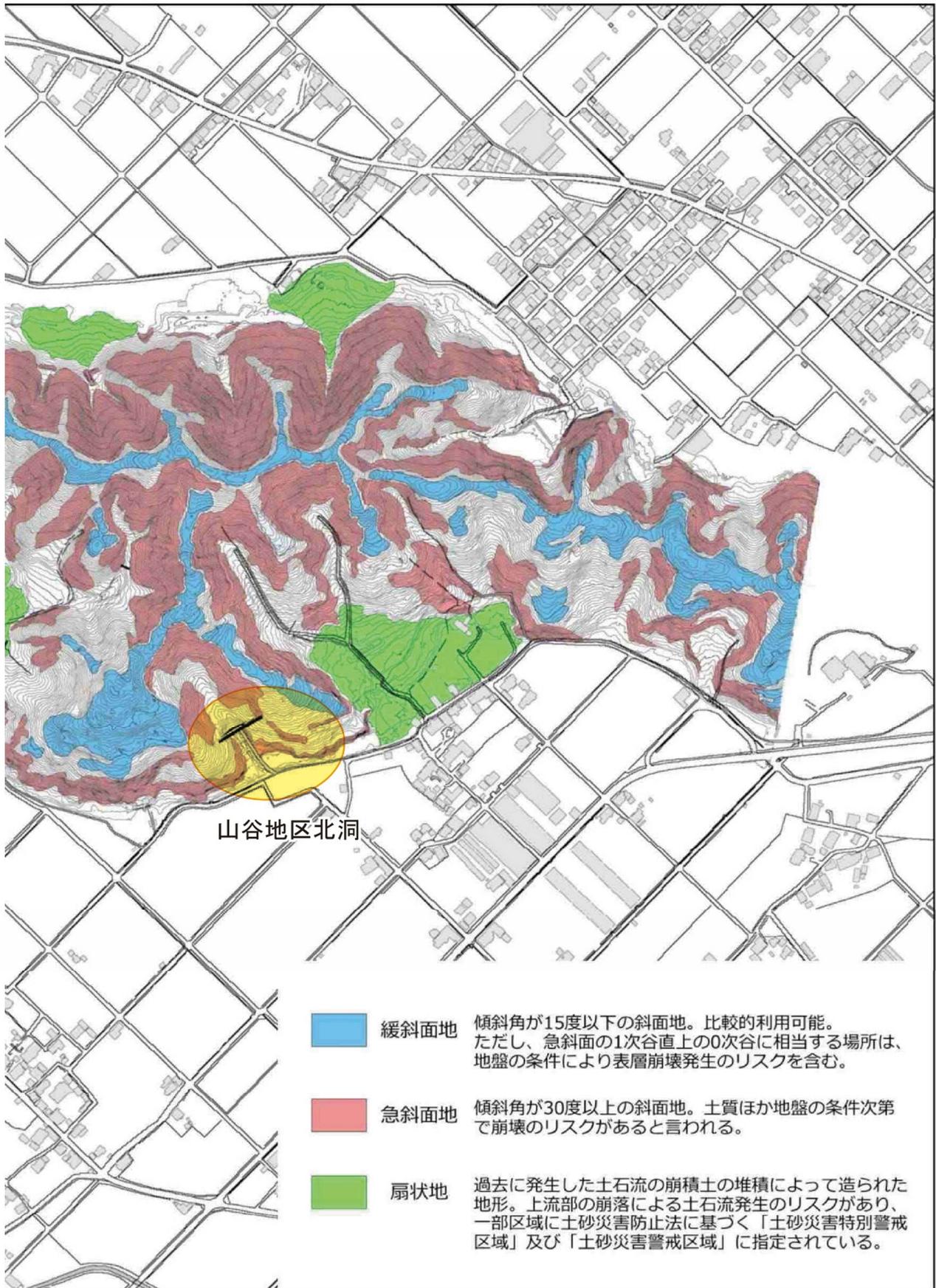


図 15：船来山傾斜危険度全体図と災害発生箇所図

(7) - 1 植物相

船来山の基本的で特徴的な植生はコジイ林である。しかし、明治時代末期から始まった富有柿の栽培により、最盛期にはほぼ山全体の広い範囲が柿畑として開拓された。

航空写真で土地利用の変遷をたどると、昭和 50 年代ごろまでは山中の柿畑による開発が主流で、盛んに柿栽培が行われていた様子が分かる。しかし、先述の災害にも見られるように、すでに昭和 51 (1976) 年には柿畑の荒廃が進んでおり、山麓や平野の他地区では柿畑用開拓が進んでいた。そのため、昭和 60 年代の写真では柿畑が徐々に減少し、平野へ移っていることが見て取れる。

現在の植生は、図 16 の凡例 38 の低木群落、船来山では最後まで柿栽培が行われた場所に分布しており、栽培終了後、先駆性の植物が生育し樹林化への遷移途中の植生と考えられる。また、元々柿畑だったエリアには、古墳も多く分布しており、低木群落が広がる要因は、発掘調査による伐開も影響を与えている。一方、早くに柿栽培を終了した場所や、発掘調査が行われていないエリアは、すでにコナラ林やコジイ林へ遷移が進んでいる。ゴルフ場開発のための発掘調査の際には、コース予定地の発掘調査区は既存の樹木がすべて伐採されて行われた。このため竹林の進出が顕著にみられ、古墳の石室の崩壊を招きかねない状況もあった。高密度で枯損木も多く見られ、倒木や落枝の危険性もある。

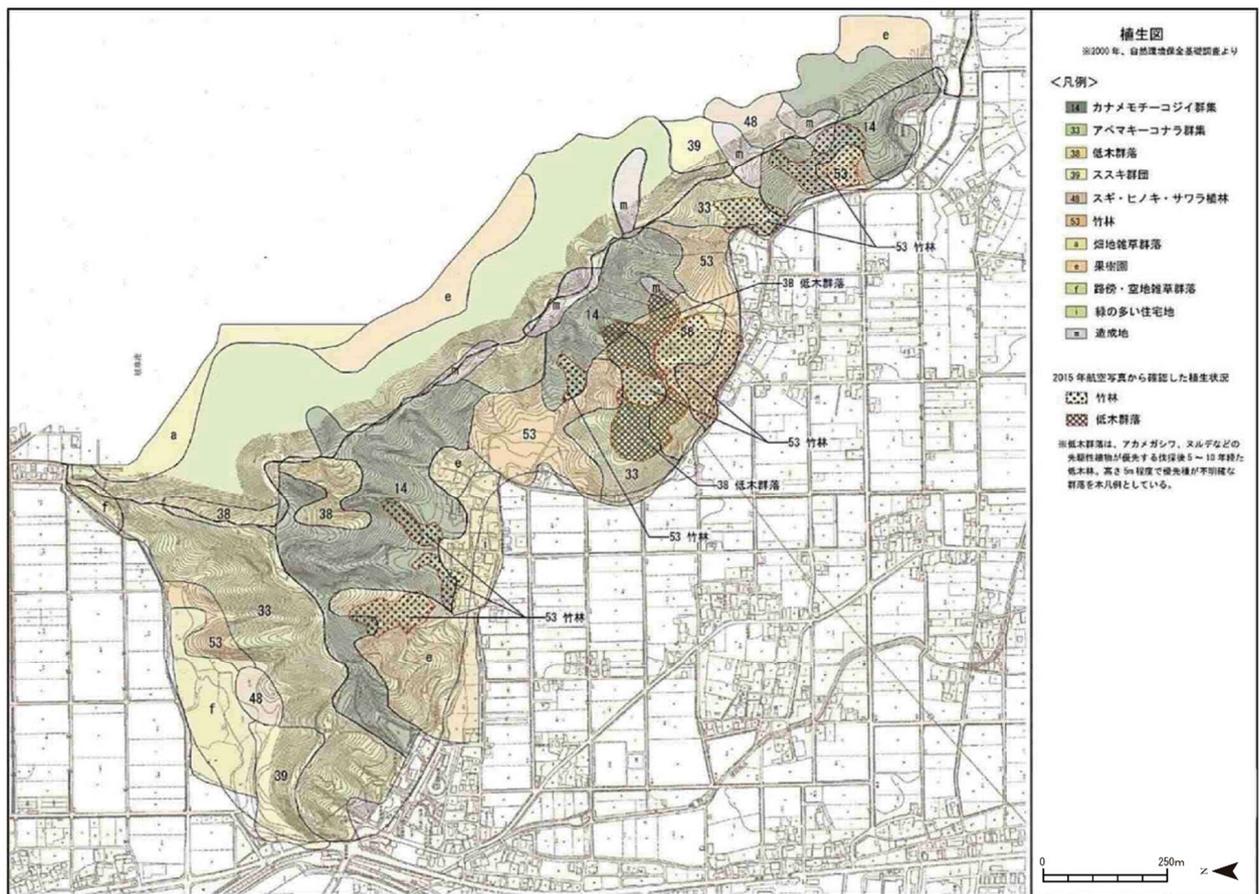


図 16 : 船来山の植生図

(7) - 2 船来山O支群の植生調査

船来山の植物に関しては、岐阜農林高等学校森林科学科が岐阜大学応用生物科学部加藤准教授指導のもと、平成27年度から令和2年度まで調査を実施している。平成31(2019)年2月26日の国史跡指定を受けてからは、船来山O支群が調査対象地となり、調査が行われた。調査は、相観の異なる樹林6箇所で10m四方のプロットを設置し、樹種及び胸高直径(直径2cm以上のものを対象)を記録するという内容で行われた。

表2：船来山O支群植生調査結果

樹種	本数	樹種	本数
ヒサカキ	90	コシアブラ	3
アカメガシワ	21	ヌルデ	2
アラカシ	15	シラキ	2
クリ	12	サカキ	2
エゴノキ	12	コナラ	2
ソヨゴ	11	カラスサンショウ	2
ヤマザクラ	8	カキ	2
センダン	8	オニグルミ	1
ツブラジイ	5	カナメモチ	1
アオハダ	4	クロガネモチ	1
リョウブ	3	モチノキ	1
ヤマフジ	3	ヤマウルシ	1
タマミズキ	3	ヤマハゼ	1



初冬の船来山O支群(平成30(2018)年1月)

調査の結果、全体として様々な広葉樹が見られ、人工的ではなく自然豊かな森林であるということが分かった。平成5（1993）年からのゴルフ場開発に伴う発掘調査によって、コースにかかる部分はすべて一旦伐採されたが、その後野鳥や動物によって種が運ばれ、現在の植生となったと考えられる。

春の樹木 薬草	
	
ヤマザクラ	フジ
	
ツブラジイ	ウラミズザクラ

秋の樹木 薬草	
	
センダン	カラスウリ
	
ヒサカキ	クリ

(8) 動物相

船来山に生息する動物相に関しては、前項の岐阜農林高等学校森林科学科による記録がある。

表3：船来山の動物相

分類	種名
哺乳類	イノシシ、シカ、タヌキ、キツネ
は虫類	ニホントカゲ、ヒバカリ、ニホンマムシ
両生類	アマガエル
昆虫類	ゲンジボタル、カブトムシ、ノコギリクワガタ、スジクワガタ、コクワガタ、カナブン、オオスズメバチ、マイマイガ、クロアゲハ、チャバネゴキブリ
甲殻類	ザリガニ
多足類	ムカデ、ヤスデ

船来山は、山麓を席田用水が流れており、ゲンジボタルの生息地として有名である。席田用水、糸貫川、真桑用水に生息するホタルは、「本巢市螢保護条例」によって保護されている。このほか多様な生態系が見られるが、上位の動物相は、エサとなる下位の動物相の生息が充実していることの恩恵を受けている。これは、船来山周辺に農地や水辺、樹林等の多様な環境が残り、カエル類、ヘビ類、トカゲ類、モグラ類、昆虫類等が多く生息しているためと考えられる。しかし近年、イノシシ、シカ、キツネといった大型哺乳類が増え、古墳への被害や近隣の人家や田畑への被害が懸念されている。船来山が里山として利用されず、管理されなくなったことから、船来山以北の山地帯から移動して住み着くようになり、生態系に影響している可能性が考えられる。

鳥類については、里地・里山で一般的に見られる野鳥のほか、船来山にはほかの丘陵地には無い希少な鳥類が見られるため、今後の整備に活かしたいことから、次項でさらに詳しく述べる。

(9) 野鳥の宝庫 船来山

船来山は、以前よりオオタカの生息地として有名であった。また近年は、フクロウの生息も確認され、近隣の山に比べると、希少な鳥類が生息・繁殖する山として大変有名である。

希少な鳥類の宝庫であるとともに、渡りの時期にサシバなどのタカ類が上空を通過していく中継地点であるという特徴も、船来山の大きな魅力である。船来山は面積が約 60.6 ha と比較的小さいのに対して、大変多くの種類の鳥類が生息しているのが大きな特徴であり、渡りの時期（春と秋）に通過していく鳥としては、サシバ、ハチクマ、ツミ、ノスリ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、コムドリ、コマドリ、コサメビタキ、エゾビタキなど約 10 種類の野鳥が確認されている。

また夏季に生息する夏鳥は、ツバメ、ヤブサメ、キビタキ、オオルリなど、冬季に生息する冬鳥は、ハイタカ、アオゲラ、アカゲラ、カケス、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、ビンズイ、アオジ、カシラダカ、ミヤマホオジロなどが確認されている。

一年中生息している留鳥は、キジ、キジバト、フクロウ、オオタカ、トビ、コゲラ、モズ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ヒヨドリ、ウグイス、ムクドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、カルガモ、アオサギ、ケリなどが確認されている。

このように、船来山では年間を通じて 80~100 種類ほどの多くの鳥類が確認されており、「渡りの中継地点であること」、「希少な猛禽類が生息していること」、「年中様々な野鳥が生息していること」から、近隣の丘陵地に比べ、野鳥の宝庫であるともいえる。

船来山の野鳥 渡りの時期（春と秋）に通過していく鳥



サシバ



ノスリ

船来山の夏鳥



キビタキ

船来山の冬鳥



ツグミ

船来山の留鳥



オオタカ



フクロウ



アオゲラ



チョウゲンボウ



イカル



モズ

(10) 景観

船来山周辺は、田園や富有柿畑などの農地が広がり、親しみを感じる伝統的な農村景観が残されている。船来山は、平野部の農村集落の背景の緑となり、農地を流れる糸貫川、席田用水などの水辺とともに、人と自然が共生する農村・里山景観を創出する重要な景観要素となっている。さらに船来山は、濃尾平野の北端に位置し、遮る丘陵等が無いことから、濃尾平野を一望できる視点場であるという魅力もある。このように、平野部からの視認性及び視点場としての特性は、今後の本史跡の整備に活かすべき要素である。



船来山から濃尾平野を望む



山麓から船来山〇支群を望む

第3節 社会的環境

(1) 交通

交通基盤の骨格を形成する主要幹線道路網は、南北に縦断する国道157号を基軸とし、これに繋がる国道303号や主要地方道岐阜大野線、岐阜関ヶ原線、山東本巣線などによって構成される。船来山は国道157号沿いにあり、市内や近隣の市町からもアクセスしやすい位置にある。また、東海環状自動車道船来山トンネルの工事が進められており、船来山から国道157号を南下した大型商業施設「モレラ岐阜」の北東部に東海環状自動車道（仮称）糸貫ICが整備され、令和6年度供用開始予定である。これらの交通網の整備により、東海環状自動車道（仮称）糸貫ICから本史跡へは車で5分の距離となる。令和元（2019）年に開通した東海環状自動車道大野・神戸ICから本史跡までは、車で15分である。東海環状自動車道が開通すると、広域からのアクセスの利便性が大きく向上する。さらに、本史跡周辺では、アクセス強化のため東海環状自動車道に連結する（都）長良糸貫線や、市道糸貫0007号線等をプロジェクト関連路線として、優先的に整備を進めている。しかし、国道157号や糸貫0007号線から史跡指定地までのアクセスは不便であり、現在は幅4m程度の市道しかない状況である。車同士のすれ違いも困難で、大型バスの乗り入れも難しい状況である。

鉄道は、第3セクターの樽見鉄道が樽見駅から大垣駅まで運行している。本史跡へは糸貫駅が最寄の駅となり、名古屋駅からJR東海道本線大垣駅経由で約40分、大垣駅で樽見鉄道に乗り換えて約25分の位置にある。樽見鉄道は地域住民の移動手段のほか、季節ごとに運行されるイベント列車（しし鍋列車など）や、温泉や桜を楽しむ観光列車としても活用されているが、最寄り駅の糸貫駅からの距離も遠く、連結する市バス「もとバス」の運行状況も芳しくない。むしろ樽見鉄道「モレラ岐阜駅」に隣接するもとバス「モレラ岐阜」バス停からの連結の方が、「もとバス」への連結が多く、本史跡の最寄りバス停である「富有柿の里」バス停への利便性が高い。また運行は毎日ではなく、火・水・土曜日のみであり、「モレラ岐阜」バス停から「富有柿の里」は一日3本、移動時間は7分である。

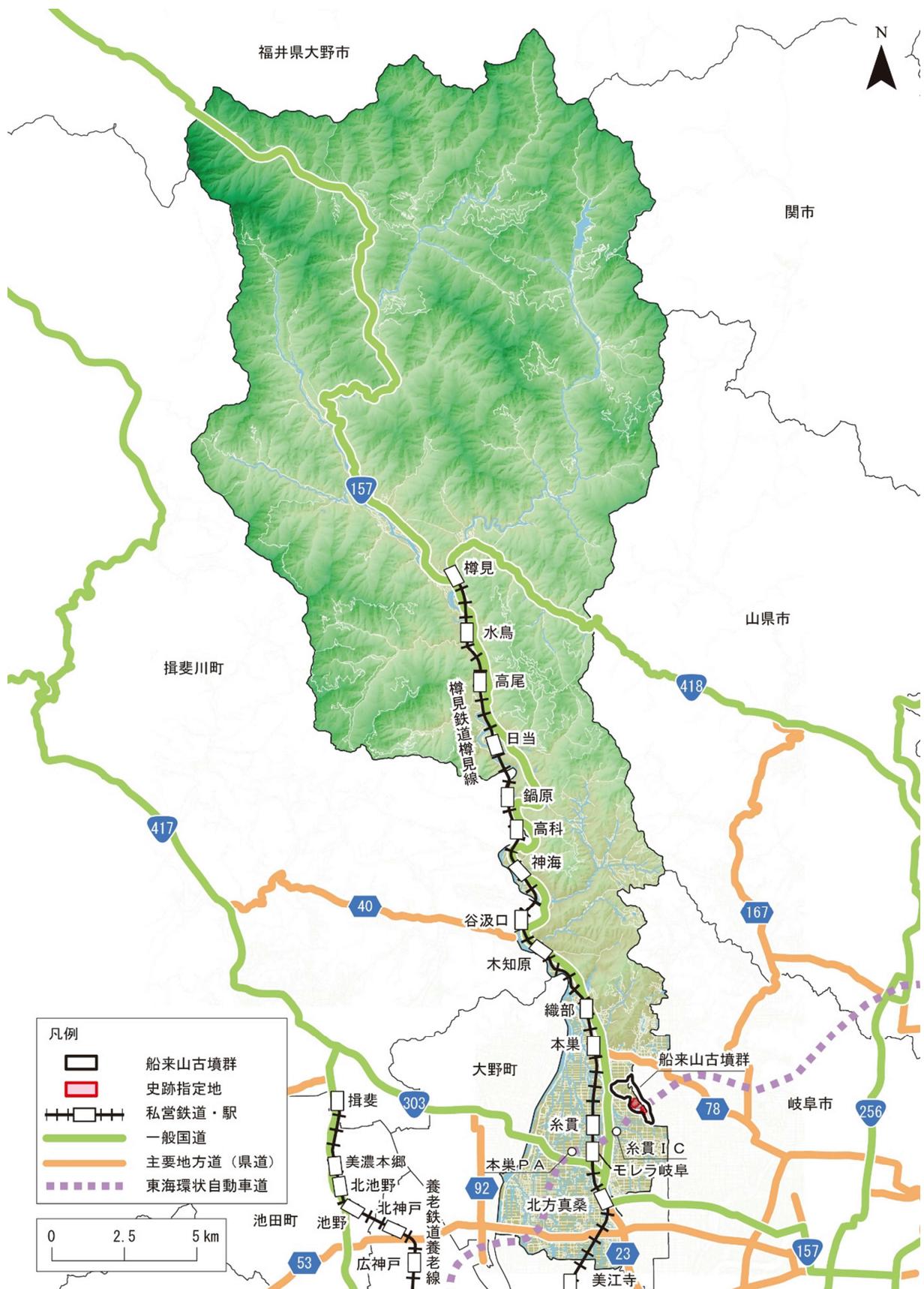


图 17：本巢市内交通網図

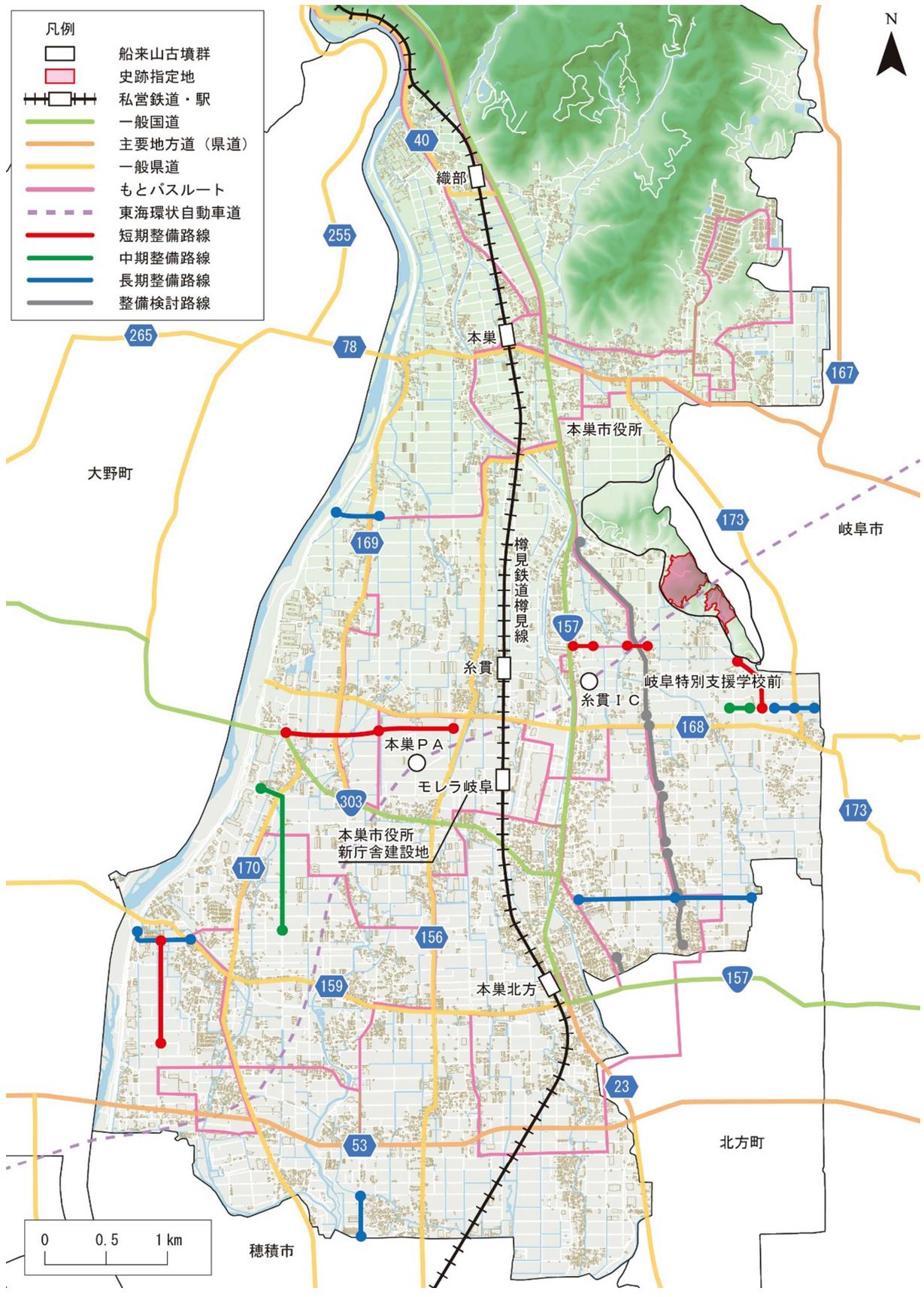


図 18：船来山及び周辺の道路計画図

(2) 周辺施設

令和5（2023）年3月現在、本市では庁舎の統合計画を進めており、大型商業施設「モレラ岐阜」の西隣、樽見鉄道「モレラ岐阜駅」の西隣に新庁舎を建設中である。統合によって、文化財部局である教育委員会事務局からも本史跡まで車で20分から5分の距離へと近くなり、大きく改善されることとなる。新庁舎は令和4年度建設開始、令和5年度完成、令和6年度供用開始予定である。

「富有柿の里」は、船来山古墳群の西端にあり、本巣市産業経済課所管施設である。園内に船来山古墳群ガイダンス施設「古墳と柿の館」、道の駅「富有柿の里いとぬき」がある。道の駅「富有柿の里いとぬき」の駐車場台数は、大型5台、普通車72（うち身障者用2）台であるが、国道から、本史跡やガイダンス施設「古墳と柿の館」への誘導サインは無い状況である。さらに、「古墳と柿の館」は園内の東端徒歩約2分の距離で、駐車場が無い現状である。本史跡にも駐車場が無く、「古墳と柿の館」からは徒歩約30分の距離である。展示品・出土品の管理と特別開館などの活用事業の担当は教育委員会社会教育課だが、施設管理は産業経済課所管のため、「古墳と柿の館」全体の総括的な管理と活用ができていない状況にある。

本史跡より北へ車で10分の場所には、国道157号沿いの道の駅「織部の里もとす」がある。樽見鉄道織部駅が隣接しており利便性があるが、「もとバス」では「富有柿の里」バス停から「織部の里もとす」へは連結していない。こうした交通網と車両動線を、どう連携するかを検討する必要がある。



図 19：船来山の周辺施設

(3) 人口

本市の人口動態は、国の平均的な動態より少し遅れて推移している。国の平均では、平成 20 (2008) 年ごろを人口増加のピークとしているが、本市では平成 22 (2010) 年をピークとして人口減少に転じている。この人口減少は少子高齢化の結果であり、本市のみならず全国の市区町村の約 7 割がこうした傾向にある。北部の根尾地域、外山地域は過疎化と高齢化が深刻な状況だが、本史跡周辺の糸貫、本巢地域は市の中心部になり、北部に比べると年少人口は若干微増している状況にある。一方で、65 歳以上の老年人口は増加し続けており、人口減少と少子高齢化は現在も続いている状態である。

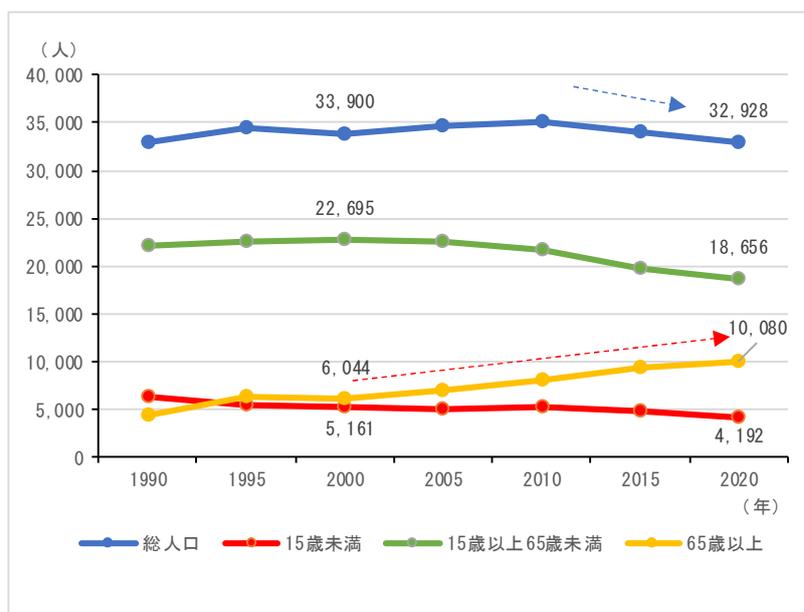


図 20：本巢市の人口の推移（総務省「国勢調査」より）

(4) 産業

本市の主な産業は農林業である。北部山間地の林業、南部の「富有柿」などの果樹、平地の水田など豊かな土地であり、また、大都市である岐阜市に向けた商品作物が盛んな土地である。特に「富有柿」は、以前は船来山を開墾して作られており、船来山周辺の産業を大きく担っていたが、昭和 50 年代から山中の柿畑は徐々に放棄されるようになり、柿畑は船来山から平野部へと移っている。さらに、農業を中心として後継者不足が年々大きくなっており、それにより農地が減っている現状もある。加えて、近年の生活様式の変化や人口動態の変動により、より安定した雇用創出が必要となっている現状もある。現在は、建設中の東海環状自動車道といった高速道路の完成による工場誘致や、より本市に特化した商品の開発、また道の駅の高機能化などに取り組んでおり、これまでの産業を変化させようとしている。

(5) 観光

本市の観光は、北部にある国指定天然記念物「根尾谷淡墨ザクラ」や、国指定特別天然記念物「根尾谷断層」など自然を楽しむ観光が主流を占めている。しかし近年は、本史跡から車で 5 分の大型商業施設「モレラ岐阜」などにも集客力があり、本市のみならず大垣・岐阜市などから多くの来場者がある。今後は上記の従来観光資源に加え、東海環状自動車道（仮称）糸貫 IC、（仮称）本巢 PA の開通と供用開始を見据え、本史跡に潜在する豊かな自然環境や自生する薬草、歴史的な地域資源、文化資源を活かして、本史跡の観光資源としての発掘、活用を図る必要がある。

本史跡は東海地方最大級の古墳群であることから、観光 PR の強化を図れば、関西方面、関東方面からの誘客も見込むことができる。また、石室を赤く塗彩する赤彩古墳が 3 基も出土していることから、彩色古墳の本場である九州方面からの誘客も見込むことができる。さらに、出土品の中に「雁木玉」、「トンボ玉」といった地下のシルクロードともいべき国際色豊かな出土品が多数あるため、海外からの誘客も見込むことができる。すでに毎年開催している春、秋の「船来山古墳群赤彩古墳の館特別開館」

では、現在でも一日に100人近い来館者が訪れ、上記の方面からの来館者が訪れている。

表4：船来山古墳群赤彩古墳の館特別開館来館者数

令和3（2021）年11月20日（土）、21日（日）	計199名 大人157名 小人42名
令和4（2022）年5月3日（祝火）～5日（祝木）	計316名 大人236名 小人80名
令和4（2022）年11月19日（土）、20日（日）	計154名 大人123名 小人31名

上記のような誘客を行うためには、県や近隣市町と連携し、地域間交流を活発にして誘客促進に努めることが重要である。さらに類似史跡を持つ市町村等との連携によって、他県への情報発信や誘客促進につなげていくことができると考えられる。また、積極的な観光PRのほか、情報発信ツールの導入や現地における史跡の解説等、観光客の満足度向上を図るとともに、今後のインバウンド対策を念頭に入れた、外国人観光客にも分かりやすい観光資源の提供に努めることも検討していくことが必要である。

（6）市民協働のまちづくり

市民協働のまちづくりは、人口減少局面に入った本市において、様々な分野で今後も重点的に取り組んでいく必要がある。また、SDGsを踏まえた「誰一人取り残さない」社会をつくるための行政運営の在り方を検討していくことも重要である。『本巢市第2次総合計画（後期基本計画）』における本市の取組に対するアンケートでは、市民同士で議論する場を設けることや、行政のサービスの充実が必要であること、市民でできることは市民で行うという意識改革が必要であることなどが挙げられた。

（6）－1 船来山古墳群ボランティア

本史跡では、「船来山古墳群ボランティア」が活動しており、緑の募金事業、岐阜県補助金、森林・山村多面的機能発揮対策交付金などを受けながら、古墳の保護活動、清掃活動を行っている。少しずつではあるが参加者も増加しており、近年では、同様の民間団体である「各務原市竹林救援隊」と連携しながら、古墳保護のために間伐した竹を、竹細工へ活用する取組も自主的に行っている。

表5：船来山古墳群ボランティアの組織概要

構成員数	17名（現在）
設立年月日	平成19（2007）年4月1日
所在地	古墳と柿の館
活動概要	船来山の清掃活動、古墳周辺の草刈・間伐活動 市内小中学校の「船来山古墳群学習」補助、船来山古墳群の案内
古墳周辺の草刈・間伐活動等維持管理の体制実績	船来山の整備活動3～4回/月 令和3年度の作業日数33日 令和3年度の参加者のべ221名 本市の計画に沿って、古墳群周辺の草刈りや竹林の伐採、遊歩道や作業道の整備、古墳整備の補助を実施 間伐竹を活用した竹炭・竹細工づくり



船来山古墳群ボランティア活動風景 1



船来山古墳群ボランティア活動風景 2

また、ガイダンス施設「古墳と柿の館」でのガイド活動・普及啓発活動も行っており、小学校社会科で古墳時代を学ぶ小学6年生の団体見学も受け入れている。小学6年生の受け入れの際には、岐阜大学教育学部との連携による教育プログラムを船来山古墳群ボランティアと協働で実施している。参加者は、本史跡周辺の住民だけではなく、古墳に愛着のある市民や、社会貢献への志のある市民もいる。

(6) - 2 船来山古墳群こども学芸員の活動

本市では、平成25(2013)年に合併10周年を迎え、これを記念として本史跡を後世へ守り伝えるために、年間講座「ふるさと学習ロマンプロジェクト」を開始した。ふるさと学習ロマンプロジェクトの中では、従来の講座に加え、学んだ成果をもとに本史跡をPRする活動も行っている。市内小中学校を中心に、小学4年生以上を対象に募集しており、特に社会科で古墳時代を学ぶ小学6年生に多く受講されている。

平成29(2017)年からは、継続して受講している受講生に対しては、新たに「こども学芸員制度」を設けて、学んだ成果をもとに本史跡のPR活動に加わっている。講座の中では、将来のガイド活動を視野に入れ、自分で選んだ古墳について深く調べて史跡現地で発表する「私の推し古墳」講座を行っている。また、ガイダンス施設「古墳と柿の館」から史跡指定地まで、山麓の古墳、神社仏閣をめぐりながらウォーキングするルートを活用しており、周遊ルートを開発する活動も行っている。



令和4年度ふるさと学習ロマンプロジェクト開講式 1



令和4年度ふるさと学習ロマンプロジェクト開講式 2

表6：ふるさと学習ロマンプロジェクト実績（令和3年度）

開催日	内容	会場	参加人数
6月26日（土）	開講式・こども学芸員認定式「史跡船来山古墳群清掃活動」	古墳と柿の館	26名
7月17日（土）	「国史跡船来山古墳群のこれからを考える」船来山古墳群整備基本計画意見交流会・ワークショップ	すこやかセンター	22名
9月25日（土）	kids 考古学新聞に応募しようオンライン講座 講師：林直樹先生（岐阜県立関高等学校教諭）	古墳と柿の館 受講生自宅	18名
10月30日（土）	船来山古墳群現地探訪 赤彩古墳から濃尾平野を眺めよう！草刈活動と古代米収穫体験	船来山古墳群	30名
11月21日（日）	「船来山24号墳出土鏡づくり」と「24号墳に葬られた豪族を推理する」教育プログラム	古墳と柿の館	27名
12月12日（日）	「探ろう岐阜の歴史」講座 本巣市代表として船来山古墳群 kids 考古学新聞を発表しよう	せきてらす	14名
3月12日（土）	閉講式（4回以上参加の受講者に修了証を授与）船来山古墳群現地探訪	船来山古墳群	23名

受講生も徐々に増え、令和4年度3月末の段階では18名の受講生が保護者・ボランティアとともに活動している（令和3年度のべ160名、令和4年度のべ200名）。保護者の同伴無しでも、自主的に参加したいという小学生の受講生や、自宅から会場の本史跡まで、もとバスを乗り継いで通う受講生もあり、講座の中でも活発に活動している。さらに、保護者やボランティアの中でも、ただ参加するだけでなく、受講生と同じ課題を受講される方も増えており、子どもから大人、高齢者までの多世代での意見交流の場、学びの場となっている。

表7：ふるさと学習ロマンプロジェクト実績（令和4年度）

開催日	内容	会場	参加人数
5月3日（祝）	開講式・こども学芸員認定式「史跡船来山古墳群を探検しよう」	船来山古墳群	25名
6月4日（土）	史跡船来山古墳群の発掘体験「新たに発見された161号墳を見学しよう」	船来山古墳群	21名
6月11日（土）	史跡船来山古墳群の発掘体験「発掘調査中の161号墳を見学しよう」2	船来山古墳群	11名
6月25日（土）	「史跡船来山古墳群の推し墳をつくろう」「古代米の歴史を学ぶ田植え体験」	船来山古墳群	21名
7月16日（土）	船来山古墳群への周遊ルートをつくろう！意見交流会・ワークショップ	視聴覚室	19名
9月10日（土）	「全国子ども考古学教室コンクールへ応募しよう、船来山古墳群周遊ツアーを考えよう」	古墳と柿の館	16名
10月29日（土）	自分の推し墳の前でプレゼンしよう！草刈活動と古代米収穫体験	船来山古墳群	20名
11月20日（土） 11月23日（祝水）	「銀の耳飾りづくり」「赤彩古墳に葬られた豪族を推理する」教育プログラム	古墳と柿の館	20名
12月4日（日）	「探ろう岐阜の歴史」講座 本巣市代表として船来山古墳群周遊ツアー案を発表しよう	せきてらす	22名
3月11日（土）	閉講式「史跡船来山古墳群を探検しよう」（4回以上参加の方に修了証を授与）	船来山古墳群	21名

(6) - 3 地域協働での船来山古墳群の活用

市民協働の中では、市の税収のみならず、今後も各種補助金や基金等の活用のほか、地域産業を活かした独自ブランド商品の開発といった新たな財源確保への取組も必要であり、これらを担う新たな団体の創出や協働体制も必要である。現在は、古墳や出土品をモチーフにした商品化を進めており、マスコットキャラクター「ふなっきー」コンテスト（平成26年度、27年度）を開催し、「ふなっきー」をプリントした野帳、文房具を古墳と柿の館で販売している。



船来山古墳群マスコットキャラクター「ふなっきー」グッズ

平成27（2015）年には、「船来山古墳群赤彩古墳の館特別開館」にあわせて、古墳出土品そっくりスイーツコンテストを開催し、市民、関係団体への啓発活動を行った。このコンテストでは、一般公募の中から高校生から大人までの参加者があり、船来山24号墳出土鏡の文様をモチーフに「鏡デコクッキー」や、「勾玉バトンクッキー」など、船来山古墳群出土品ならではの美味しいスイーツが入賞した。令和2年度には、本巣市商工会と連携し、関係団体への呼びかけとチラシを配布するなど、取組を進めている。

こうした意識の向上と志のある市民が集う場所、市民同士で議論する場として本史跡を位置づけたい。さらに、参加者が本市の魅力を認識し、一人ひとりが社会貢献への誇りと愛着をもって積極的に活動できるように、意識向上と団体としての活動の充実を進め、本市としてもそのサポートを継続していく。



船来山古墳群出土品そっくりスイーツコンテスト受賞作品